

教員の授業改善につながる校内研究支援の在り方

－ 研究推進校が目指す児童の具現化と教員一人一人の自律的な学びに資する校内研究支援を通して－

主 幹・指導主事 渡邊 昭二郎 主 幹・指導主事 志村 貴美子
副主査・指導主事 渡邊 信也 副主査・指導主事 小林 裕直
指導主事 有賀 拓也

キーワード 目指す児童の具現化への支援 教員の自律的な学び 「学びの充実シート」

I 主題設定の理由

総合教育センター（以下本センター）では、学校現場のニーズに応じた校内研究支援を進めることを目的とした「研究支援」に取り組んできた。これは、本センターが学校に対してどのような支援を行うことができるかを探るものである。小学校チームでは今年度も学校教育支援を目的とし、研究推進校と協同的に「授業づくり・学校づくり」を推進する実践研究を行っていくこととした。

校内研究は、児童の教育のために、教職員が協同で行う研究である。児童の実態を適切に把握し、目指す児童の姿を具現化するにはどうすればよいか研究の中心となる。しかし、教育課題が多様化・複雑化する教育現場において、校内研究の進め方に多くの学校が様々な悩みを抱えており、研究の成果が教員一人一人の授業改善につながっていないケースが見られる。そこで本研究では、研究推進校と互いに意見を出し合いながら支援の在り方を探ることを通して、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善につながる校内研究に着目した。

令和6年度、小学校チームは、令和5年度から研究推進校である大月市立鳥沢小学校と研究を進めた。同一研究推進校で複数年にわたり協同研究を進めることで、より系統的・計画的な実践を探ることを意図している。具体的な取組としては、学校の要望を踏まえ、本センターのシンクタンク機能を生かした支援を行い、研究推進校における校内研究の活性化を目指す。更に、拡大校内研究会及び研究大会等において研究内容を県下に広げ、各学校の校内研究の活性化につなげるとともに、各学校への有効な教育支援の在り方を探りたいと考えた。

II 研究の目的

教員一人一人の授業改善につながる校内研究を目指す本センターの支援が、研究推進校に対してどのような成果と課題をもたらしたかを検証し、学校における校内研究への支援の在り方を探る。

III 研究の方法

- ・校内研究の運営に関する連絡を密にし、管理職や研究主任との連携を図る。
- ・研究主題を具現化するために、学習会、指導案検討、研究授業、研究会などにおいて情報提供や指導・助言をする。
- ・PDCAサイクルに基づいた教員の授業改善を支援する作成物を活用し、教員の自律的な学びを促進する。
- ・検証の手立てとして質問調査を実施し、校内研究に対する意識の変容を見取る。

IV 研究経過

1 センター研究日

4月15日（月）オリエンテーション

4月16日（火）センター研究

- ・研究計画の検討、支援内容の確認

5月14日（火）研究計画発表会

5月20日（月）山梨大学連携・教育研究会

6月18日（火）センター研究

- ・1学期の支援内容の検討

7月16日（火）センター研究

- ・2学期の支援内容の検討

9月19日（木）中間発表会

10月17日（木）センター研究

- ・2学期の支援内容の検討

11月15日（金）センター研究

- ・3学期の支援内容の検討

- 11月19日（火）山梨大学連携・教育研究会
- 12月12日（木）センター研究
 - ・アンケート結果の検討
- 1月15日（水）センター研究
 - ・所内発表会の検討
- 1月22日（水）所内発表会
- 2月6日（木）センター研究
 - ・研究紀要の検討
- 2月26日（水）センター研究大会
- 3月4日（火）来年度の方向性の検討

2 学校訪問

【大月市立鳥沢小学校】

- 4月9日（火）
 - ・委嘱状交付 ・打ち合わせ
- 4月24日（水）
 - ・学習会
 - 「子供主体の授業づくり」について
- 6月17日（月）
 - ・学習会
 - 「児童が『問い』をもつ算数科の授業づくり」について（山梨大学アドバイザー招聘）
- 7月17日（水）
 - ・全国学力・学習状況調査（以下全国学調）の自校採点
- 8月28日（水）
 - ・児童が「問い」をもつ算数科の授業づくり
- 10月3日（木）
 - ・一人一実践授業への指導助言
- 10月16日（水）
 - ・学習指導案検討（山梨大学アドバイザー招聘）
- 10月21日（月）
 - ・一人一実践授業への指導助言
- 10月30日（水）
 - ・一人一実践授業への指導助言
- 11月11日（月）
 - ・一人一実践授業への指導助言
- 11月13日（水）
 - ・拡大校内研究会

V 具体的な取組

小学校チームでは、大月市立鳥沢小学校を研究推進校に指定し、2年目となる研究支援を行ってきた。推進校の要望に沿った支援を行い、校内研究が活性化されるように努めた。本センターの機能を活用しながら学校全体の授業力向上を目指し、教員一人一人の授業改善につなげるとともに、年間を通して校内研究の目的が意識できるように支援を行った。その研究支援が研究推進校のニーズに応えるものになるよう、管理職や研究主任と相談の上、支援計画を決定した。

1 研究推進校が目指す児童の具現化に資する支援

（1）鳥沢小学校（研究推進校2年目）

鳥沢小学校は、研究主題を「主体的に学びに向かう児童の育成」、研究副題を「探究的な学習過程に重点を置いて」とし、研究を進めた。

研究推進校2年目は、学習者である子供主体の授業づくりに注目し、研究主題・研究副題に向けて校内研究を行った。研究主題に設定した児童の姿を具現化するために、本センターからどのような支援が有効であるかを研究主任と丁寧に検討した。

4月には、「子供主体の授業づくり」について学習会を行った。本センター指導主事が講師を務め、求められる背景、具体的な児童の姿、具体の授業について学びを深めた。6月には、「児童が『問い』をもつ算数科の授業づくり」について学習会を行った。山梨大学の角田大輔准教授が講師を務め、児童が「問い」をもつことが研究主題の実現に向けてポイントであることが確認された。7月には、全国学調の自校採点学習会を行った。学習会を通して、算数科における鳥沢小学校の成果と課題、今後取り組んでいくことが明確になった。8月には、実際に算数科の授業づくりを校内研究会の中で行った。学習会を通して学んできたことを意識して授業づくりを行った。

2学期には、研究授業、拡大校内研究会を行い、実践を通して学び合う機会をもった。これらには、山梨大学の角田大輔准教授、本センターの指導主事が関わり、指導案検討や研究会の指導助言を行った。また、一人一実践では、昨年度同様、本センター指導主事が算数科を中心に指導・助言をした。日常の授業において、子供主体の授業づくりの視

点で授業改善を進めた。

(2) 学習会の実施

ア 「子供主体の授業づくり」について

4月に「子供主体の授業づくり」についてをテーマに学習会を行った。本センター指導主事が講師を務め、求められる背景、具体的な児童の姿、具体的な授業について、文部科学省及び県教育委員会から示されている資料や実践例を基に学習を進めた。学習会では、話題に対して鳥沢小学校の教員がそれぞれ自分の考えを明らかにし、意見を交流した。

求められる背景については、急激に変化する時代においてどのような児童を育成していく必要があるのか、また、多様化する児童を取り巻く環境の中で、いかに児童一人一人を大切にしていかが話し合われた。

具体的な児童の姿については、山梨県教育大綱で示されている「自立した学習者」を育成していくことが共有された。昨年度の鳥沢小学校の校内研究で育成を目指した「読解力」に再度注目し、その育成には学習の基盤となる資質・能力の一つである問題発見・解決能力の育成が大切になることも話題に挙げられた。

具体的な授業については、1単位時間の授業改善だけでなく、単元全体で主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組むことの大切さが共有された。鳥沢小学校の教員からは、「子供が目標を立てる授業」「学びの過程を振り返り、自己を見直す授業」などの意見が出された。

学習会を通して、学校全体で具体的な児童の姿や授業を共有したことは、1年間の研究を焦点化して進める上で大切な機会となった。

イ 「児童が『問い』をもつ算数科の授業づくり」について

6月に「児童が『問い』をもつ算数科の授業づくり」についてをテーマに学習会を行った。山梨大学アドバイザーの角田大輔准教授が講師を務めた。講師からは、子供が自ら問う力を育てることの大切さや、そのために教師が問い返すことの必要性を具体例を示しながら説明された。

鳥沢小学校の教員からは、「根拠を問うことに意識をおいた授業づくり」や「教師から児童に問いをもたせ、徐々に児童から問いが生まれるような

授業づくり」といった、今後の授業づくりの方向性に関する意見が出された。

ウ 全国学力・学習状況調査の自校採点

本センターでは、以前より、全国学調実施後に自校採点を行い、各学校での授業改善に活用することを推奨している。昨年度に引き続き、鳥沢小学校において、7月に全教員で算数科の自校採点及び分析を行った。その際、本センター指導主事は採点のポイントを示したり、教員からの疑問に答えたりした。

自校採点を行うことによって、全国や山梨県などの結果の報告だけでは見えてこない、目の前の児童の実態を明らかにすることができる。また、実際に教員が採点をすることにより全国学調の出題意図を把握することができ、そこから児童にどのような資質・能力を身に付けさせることが求められているのかを知ることができる。

鳥沢小学校の教員からは、自校採点を行った結果、「式と言葉を組み合わせ、説明することができるようにする。」「友達の考えのよさを見つける機会を設け、自分の考えにつなげていく。」という声が聞かれた。全教員で課題を共有し、学校全体で授業改善に取り組むきっかけとなった。

エ 「算数科における問いをもつ授業づくり」について

8月に「算数科における問いをもつ授業づくり」についてをテーマに学習会を行った。研究主任から「これまで学んできた『問いをもたせる授業づくり』について、より理解を深めるために算数科の授業の構想を練る」ことが目的であると確認された。本センターから指導主事が3名参加し、適宜助言をした。「既習事項を問う」「根拠を問う」場面を意識し、鳥沢小学校の教員一人一人が2学期以降に行う授業を構想した。

鳥沢小学校の教員からは、「児童の実態を考えながら授業案を作成していくことが大切である。」

「子供が問いをもつことができるようにするために、まずは教師が『なぜ』『どうして』という言葉を使っていく必要がある。」という考えが出された。

管理職から学級担任へ適宜助言するなど、目指す児童の具現化に向け学校全体で授業づくりに取り組んだ。

(3) 一人一実践の取組

2学期に入り、10月、11月に一人一実践が実施された。ここでは、本センター指導主事が算数科の授業に対して指導・助言をした。8月に行われた「算数科における問いをもつ授業づくり」についてをテーマにした学習会で作成した略案を基に授業実践がされた。そのため、「既習事項を問う」「根拠を問う」といった授業づくりの視点や、全国学調の自校採点で見られた課題を意識した授業内容であった。1学期にインプットしてきた理論をアウトプットする実践となった。一人一実践の取組を通して、日常の授業改善を意識することで学校全体としての授業力向上につながる取組となった。

授業後の鳥沢小学校の教員の振り返りには、「子供の考えを共有する中で、個人の考えを丁寧に問うことの大切さを改めて確認できた。」「子供が下学年で学んだことを今の学習に結び付けて考えられるように、今までとの違いを丁寧に問うようにする。」など、子供の考えを丁寧に見取ることや既習事項を基に授業を展開することの重要性を再認識した様子が見られた。

(4) 拡大校内研究会

ア 授業の実際

(ア) 鳥沢小学校における拡大校内研究会の実際

11月13日に第5学年の算数科において研究授業・研究会を行った。実施単元はB「図形」領域の

(3)「平面図形の面積」である。総時間数10時間のうち、8時間目を本時に設定し、「これまで学習してきたことを生かして、台形の面積を求める公式を考えることができる」という目標のもと、研究授業を行った。

a 研究授業の様子

本時は台形の求積公式をつくることをねらいとしている。そこで、前時では平行四辺形と三角形の求積公式までの過程を振り返り、公式をつくるまでの過程が「①形を変えて面積を求める。②面積を求めるために使う長さを考える。③面積を求める公式をつくる。」の3つになることを確認した。そして、次に考える図形として台形を提示し、上底3cm、下底9cm、高さ4cmの台形の求積を行った。児童は既習事項をもとに等積変形や倍積変形しながら面積が24cm²になることを求めた。

本時ではまず、前時の学習を振り返り、公式をつくるまでの過程②③が本時の活動になることを

確認し、「台形の面積を求める公式を考えよう」をめあてとした。

次に、前時の2つの考えを取り上げ、どのように形を変えて面積を求めたのか共有した。1つ目に取り上げたのは倍積変形の考えAである。 $12 \times 4 \div 2 = 24$ という式を取り上げ、式からどのような変形をしたのかを問うた。挙手した児童に電子黒板で操作させながら変形方法を共有した。2つ目に取り上げたのは等積変形の考えBである。1つ目と同様に $12 \times 2 = 24$ という式を取り上げ、変形方法を共有した。そして、この2つの考えを軸にしながらか公式をつくっていくため、2つの変形方法と式をワークシートに記入させた。

$12 \times 4 \div 2 = 24$

$(9 + 3) \times 4 \div 2$

まず、同じ台形を逆にし合わせ平行四辺形にする。次に、面積を求める。最後に2である。

考えA

$12 \times 2 = 24$

$(9 + 3) \times 2$

まず、高さ2cmのところまで切る。次に、逆にし合わせ、平行四辺形にする。最後に、面積を求める。

考えB

続いて自力解決の見通しをもたせるため、「この長さ(12cm)ってどうやって出てきたのかな?」と問うた。この問いによって2つの式のどこに着目すべきかを意識させたところで、自力解決に入った。

自力解決では、考えA・Bの12を9+3に直す児童が12人中7名、考えBの2を4÷2に直す児童が5名いた。しかし、そこから台形の求積公式をつくるのがなかなかできなかった。その様子から、前時に確認していた「上底」「下底」「高さ」について再度振り返り、公式が導けるよう支援した。再確認をしたことで5名の児童が求積公式を導くことができた。

全体検討では、考えBの式を変形させるところから行った。 $12 \times 2 = (9 + 3) \times (4 \div 2)$ と式変形していた児童を取り上げ、式に使われている数値が台形のどこの長さになるのかを問いつつ式の意味を確認した。そして、台形の求積に必要な部分をもとに公式を明らかにしていった。続いて、考えBの過程を参考にさせながら考えAも同様に考えさせ、どちらの考えも同じ言葉の式になることを確認した。

最後に、教科書のまとめを参考にしながら「台形の面積=(上底+下底)×高さ÷2で求められる」と本時のまとめを行い、振り返りをワークシ

ートに書かせた。そして「今日一人で公式がつくれてよかったです」と振り返りを書いた児童に発表させ、授業を終えた。

b 事後研究会

まず、対話リフレクションによる授業の振り返りを行った。授業者からは、「児童が『問い』をもつ算数科の授業づくり」に関して、「①既習を問うこと」、「②根拠を問うこと」を視点として取り組み、教師が子供の考えを価値づけしたり言語化したりして子供に返ししながら定着を図ったことが工夫として挙げられた。また平行四辺形の授業の中で子供のつぶやきを拾って、「根拠」という言葉を使い、慣れるようにしたことや他教科(国語科等)でも意識し授業実践を行ったこと、が述べられた。反省点としては、「言葉の式」をつくる時に、言葉を押さえなかった点であり、計画どおりに実践することの難しさについても語られた。良かった点としては、普段算数科に自信がもてない児童が発表できたこと、その児童が「公式をつくること」ができてよかった」と感想を述べていたこと等が挙げられた。

全体質問では、「①式における()の意味や既習事項(式の変形)の活用」、「②教師の支援や手立ての仕方」、「③自力解決場面での児童の把握(見取り・評価)」が参加者より出され、公式の意味等算数科の指導に関連する事項と、普段の授業での指導・支援に関する事項とが話題の中心となった。また前時とのつながりの大切さや教師の指導意図と授業内容の関わりについての意見も出されていた。

グループ討議では、4つのグループそれぞれが成果や課題と捉えた点を整理する中で、授業の振り返りや分析を進めた。代表として2つのグループが発表を行ったが、主に2つの点が討議の柱として挙げられた。1つ目は、「既習を問うこと」である。「既習事項が身についていた」「これまでに得た情報をよく活用していた」点が成果として挙げられていた一方で、「問い返しにより、子供を揺さぶってもよかったのではないかな」という教師側の意見の受け止め方についての課題点も挙げられた。

2点目は「自力解決について」である。児童自身が分からないことは分からないと言えたこと、課題を自分事として捉えていたことは成果として挙げられた。その一方で、「分からない子に対して

教師がすぐに支援してしまうのではなく、まず一人で考えさせる場面があってもよかったのではないかな」等見取りの大切さに関する指摘もあった。また、「新しく出てきた算数用語に対しては一度立ち止まるべきだったのではないかな」という意見も出された。

討議後、山梨大学の角田大輔准教授から指導・助言をいただいた。問い返しや発問の意義として、「子供どうしの言葉で語り合うことで言葉が洗練されていくこと」をご教授いただいた。また図形の授業の最初の段階においては、複雑な変形の発想であっても全て表出させ、「もっとシンプルにしたい」→「だから習ったことを使うとよい」→「公式をつくりたい」という子供の発想を引き出し、授業づくりをしていくことについてもご教授いただいた。今後に向けては、児童のつぶやきや記述を取り上げる中で、「(その1時間の中で)主役にしたい子」を意識すること、「誰の考えをどの順番でどのように取り上げるかは、教師の腕の見せ所であり、比較検討場面の想定をすることが大切」との助言をいただいた。教師が主体性をもって毎回チャレンジしながら授業をしていく心構えについてもご示唆いただいた。

(5) 目指す児童の具現化に向けた本センターの支援について

研究推進校からは、目指す児童の具現化の見取りとして、次のような児童の姿が示された。

既習を問う姿として、2年生算数「かけ算」の授業では、3の段の九九のきまりを見つける場面において、児童が5の段や2の段での既習を生かして、3の段の九九のきまりを導く姿。

根拠を問う姿として、5年生算数「四角形と三角形の面積」の授業では、台形の面積の求め方について、児童が既習である三角形や四角形のどの図形に変形したのか、式の数値は図のどの部分を指すのかなど、根拠を明らかにし、筋道立てて説明する姿。

児童の変容は即座に見られるものではないが、研究推進校では、今後も教員の共通理解と児童の実態把握を大切に、地道な取組を積み重ねていきたいと考えている。また、学習会や自校採点など

の本センターの研究支援に対し、研究推進校で目指す児童の姿や具体的な授業が共有でき、研究の方向性が明確になったとの意見をいただいた。

2 教員一人一人の自律的な学びに資する支援

令和5年度まで、本センターでは研究推進校の校内研究を支援するにあたり、教員一人一人の授業改善につながることを目的に記述式のシートを提案してきた。令和5年度までのシートは、授業で明らかになった成果や課題、改善策等に焦点を当てたものであり、年間に計画された校内研究全体を通した教員の学びには適したものではなかった。

そこで、令和6年度は、教員が校内研究会での学びを日々の授業改善に生かしていくことを目的に、「学びの充実シート（以下本シート）」（図1）に取り組んだ。

RO年度 学びの充実シート		名前
学校教育目標		
研究主題		
今年度重点的に育成を目指す資質・能力		
【見通し】育成を目指す資質・能力に向けて、取り組もうと考えていること		
◆Keep（よさ・継続すること）		
◆Try（今年度取り組んでいきたいこと）		
◆Problem（課題）		
校内研究会から学んだことを明日の授業に生かそう！ ～授業アップデート～		
月	日	授業 学んだこと（授業で明らかになった有効な手立てや改善策など）
		明日からの授業で活用したいこと 今後、検討したいこと
【振り返り】		
◆Keep（よさ・継続すること）		
◆Try（今後取り組んでいきたいこと）		
◆Problem（課題）		
◆次年度に向けて学びたい内容や受講したい研修等		

図1：学びの充実シート

(1) 「学びの充実シート」について

本シートは、校内研究での自身の成果及び課題を整理したり、校内研究での学びを日々の授業に結び付けたりすることを通し、継続的な授業改善につなげようとする教員の姿を目指す。研究を進めていくと、研究授業自体が目的になってしまい、

学校教育目標や研究主題とのつながりが希薄になってしまうことがある。そのため、本シートを活用することで、教員が学校教育目標や研究主題等に立ち返ることができるようにした。その上で、教員自身が自己の目標を設定し、見通しを明確にもちながら授業改善を図ることができることを目的に本シートを作成した。

(2) 研究推進校での取組

ア 活用方法

年度始めの校内研究会において、本センターから研究推進校に対し本シートの説明を行った。特に意識する点として、校内研究会の各回の学びを振り返り、自分自身の授業に生かしていく視点をもつことを挙げた。そして、その実践のために「学びの充実シート」に取り組むことを伝え、校内研究会後に振り返りを実施した。また、ファイルをクラウド上で共有し、教員間で閲覧できるようにし、他者の振り返りから学びを得ることも可能とした。

イ 授業改善に生かす具体的事例

ここでは、教員Aの記述を提示しながら、実際に校内研究での学びをどのように授業改善に生かしたのかを示す。

以下は、教員Aの本シートへの記述の一部である。

月	校内研内容	記述内容
6	算数科学習会	スモールステップを意識しすぎると問いが出づらいことから、あまり「スモールステップ」にこだわる展開はやめる。
7	全国学力・学習状況調査自校採点	自分の考えを説明する時にその根拠を問いながら思考を深めさせるようにする。
8	算数科授業づくり（2学期の授業実践に向けて）	「根拠を問う」ことに視点を当てた授業づくりをすることができた。教科書のデジタルコンテンツを活用して個別最適化も進められることに気づいた。
10	指導案検討会（教員Aとは別の教員）	試行錯誤する時間をたくさんとる中で、児童同士で不要なところをそぎ落としながら公式を生みだしていく。教師主体ではなく児童主体であるという意識を常に持つようにする。
	教員Aの授業実践	自分の思考を表現するのに、ICTが良いか紙が良いかを見極めることが大切である。

		児童の考えを共有する中で個人の考えを丁寧に問うことの大切さについて再度確認できた。
		子どもが下学年で学んだことを今の学習に結び付けて考えられるように、今までとの違いなどを丁寧に問うようにする。
11	拡大校内研究会（教員Aとは別の教員）	児童主体の授業を進めるために、導入でわくわくするような仕掛けをしたり、集団解決する際、違う考え方をする児童と自分の思考とのずれを相手に問いながら考えを深めたりしていきようにする。

教員Aは、年度当初、担任する児童の課題として、「疑問に思ったことを自分から進んで調べたり、考えたりすること」と記述しており、児童が自ら問いをもち考えることに課題があると捉えている。

6月の学習会後の振り返りでは、自身のこれまでの授業構成を内省し、児童から問いを引き出すような授業づくりを意識していることがうかがえる。7月、8月には、「根拠を問う」という記述が見られる。「既習を問う」、「根拠を問う」等は、研究推進校で育成を目指す児童の姿であり、教員Aが常に研究主題を意識して授業づくりをしていることがわかる。このように、教員一人一人が校内研究で目指す児童の姿を意識して日々の授業に取り組むことが、研究主題を具現化するためには大切であると言える。

10月の記述は、教員A自身が実施した授業実践後の振り返りである。「児童の考えを共有する中で個人の考えを丁寧に問うことの大切さについて再度確認できた」、「子どもが下学年で学んだことを今の学習に結び付けて考えられるように、今までとの違いなどを丁寧に問うようにする」という記述から、児童の考えを丁寧に見取ることや既習を基に授業を展開することの重要性を再認識した様子がうかがえる。また、本実践における教員Aの指導案からは、導入過程において児童の興味関心を醸成するようなめあての提示や、比較検討場面において、児童自身に考えの根拠をもたせることを意識した授業づくりをしていることが見て取れた。

以上、教員Aの記述内容から、4月からの校内研究会を通して、自身の成果及び課題を整理したり、校内研究での学びを日々の授業に結び付けた

りして、継続的な授業改善につなげようとする姿が把握できた。

(3)「学びの充実シート」の有効性

校内研究支援の視点から、本シートの有効性を3点に整理する。

1点目は、教員一人一人が校内研究会から学んだことを実践・自己評価を行い、授業改善につながるPDCAサイクルをまわす姿が見られたことである。このことは、以下に示す研究推進校の教員の振り返りからも見て取れた。

「学びの充実シート」についての振り返りは、一度立ち止まって再考するよい機会になった。書くことで次の授業でどうすればよいかを意識でき、有効だった。
個人的な記録ではなく、指定されている形式で記録を残したので、研究とその継続性に親和性の高い記録・反省となったと感じている。
学びの充実シートに記入することにより、その時間何を学んだのか、自分の課題は何か、その課題を解決するためにはどのような手立てが必要なのかをじっくりと考えることができた。このように振り返ることにより、より充実した研究会になったと感じた。

2点目は、研究主任が個々の教員の振り返りを見取ることにより、教員の疑問や課題を整理し、校内研究会の内容を調整できたことである。実際に研究推進校では、年度当初に立てた校内研究計画について、研究主任が教員の課題意識を適宜把握し、目指す児童の姿の実現に向け、各回の校内研究会の内容を修正しながら運営していた。

3点目は、本センターが個々の教員の記述について継続的に見取ることにより、授業観や授業づくりの意識の変容を把握しながら具体的な支援に生かされたことである。

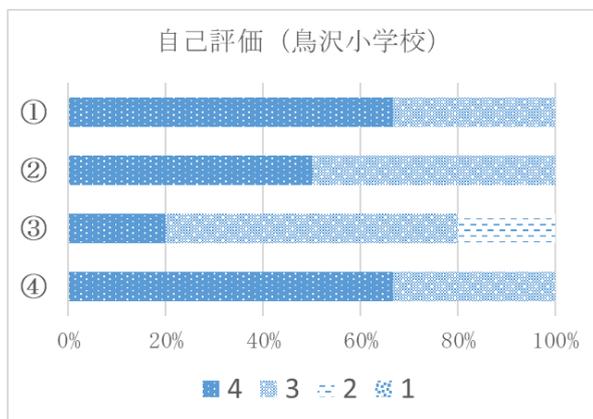
本シートを研究推進校以外の学校でも有効活用することにより、教員の自律的な学びが促進されることを期待したい。

3 アンケートの実施

本研究の検証の手段として、研究推進校の教員を対象に、12月にアンケートを実施した。

○アンケート項目及び結果

- ① 校内研における学習会等の実施
 - ・学習者主体の授業づくりについての学習会（4月）
 - ・「児童が『問い』をもつ算数科の授業づくり」についての学習会（6月）
 - ・全国学力・学習状況調査（算数科）自校採点（7月）
 - ② 校内研における研究授業の実施（指導案検討、研究会等）
 - ③ シートの活用
 - ・「学びの充実シート」の取組について
 - ④ 校内研への取組の姿勢（主体的に取り組めたか）
 - ⑤ 校内研究による自身の授業改善における成果
 - ⑥ 校内研究の中で感じた授業改善における課題
 - ⑦ 校内研究により見えた今後取り組みたいこと
 - ⑧ 「学びの充実シート」について
 - ⑨ センター研究に関する意見・感想
- ※①～④は充実度・満足度の自己評価尺度として「4：高い」「3：やや高い」「2：やや低い」「1：低い」で評価 ⑤～⑨は記述で回答



（回答者数 12 名）

- ⑤ 校内研究による自身の授業改善における成果（記述回答より）
 - ・子どもたちに問いをもたせるための手立てについて、学ぶことができた。まずは、問うべき問いを教師が子どもたちに問うことが何よりも大切だとわかり、日々の授業でも、意識して取り組むようにしている。
 - ・子どもが「問い」をもつための問いかけ等の工夫について、色々な手立てを知ることができた。同じような場面でも、引き出しを複数

もっていることで目の前の子どもに合った方法を選び、指導に生かすことができた。

- ⑥ 校内研究の中で感じた授業改善における課題（記述回答より）
 - ・自分の授業構想や流れに、子どもたちを乗せたいという傾向があるので、喋りすぎず、子どもたちから自然に「問い」を発する授業を日々心掛けていかなければならない。
 - ・「問い」のもたせ方を意識した授業に取り組んだが、まだまだ研究と実践が必要ではないかと考えている。また、ICTの活用にもう少し取り組んでいけたらと思う。
- ⑦ 校内研究により見えた今後取り組みたいこと（記述回答より）
 - ・今年の校内研究のテーマである 児童主体の授業づくり、探究的な学習、児童に問いをもたせる授業を実践することができるように、今年学んだことをより充実したものになるように努めていきたい。
 - ・授業を計画する中で、問うべき問いは何かを考え、単元を通して子どもたちに問い続けていきたい。
- ⑧ 「学びの充実シート」について（※ V2（3）参照）
- ⑨ センター研究に関する意見・感想（記述回答より）
 - ・継続して来校、研究会に参加していただき、とても心強く感じた。4月の学習会は他の研修と重なり参加できなかったが、6月、7月の学習会は授業を受け持っていない立場でも、今の子どもたちに必要な学びや指導方法についての理解が深まった。
 - ・この2年間、先生方と共に「教師も学ぶ鳥沢小学校」を実践でき、丁寧な指導で学ぶことが多く有り難かった。校内のみでなく外から授業を観てもらうことで、先生方の授業に緊張感があり、指導に対しより深く考えることができた。

VI 今年度の研究の成果と課題

1 成果

研究支援の成果として、以下の3点を挙げる。

1点目は、各種学習会や全国学調の自校採点を通して授業改善を図ることにより、研究推進校が目指す児童の姿の具現化に寄与することができたことである。特に、**V1(1)エ 算数科における問いをもつ授業づくり**についての項で示したように、研究主任と本センターとが話し合う中で校内研究の計画を修正し、全員で目指す児童の姿を共有した授業づくりに取り組んだことは、全教員の授業力向上につながる校内研究になったと言える。

2点目は、「学びの充実シート」を活用することにより、自身の成果及び課題を整理したり、校内研究での学びを日々の授業に結び付けたりして、継続的な授業改善につなげようとする姿が見られたことである。また、研究主任が個々の教員の振り返りを見取ることにより、教員の疑問や課題を整理し、校内研究会の内容を調整できた点も成果と言える。

3点目は、研究支援1年目の年度末に、校内研究の成果や課題を研究推進校と本センターとが共有・検討したことにより、研究推進校が2年目の校内研究に見通しをもって取り組むことができたことである。これは、**V3アンケートの実施**の項の**④校内研への取組の姿勢（主体的に取り組めたか）**のアンケート結果の満足度が高いことからも見取れる。ここに、本センターの研究支援の取組が2年間継続していることの意義があると言える。

2 課題

研究支援の課題として、以下の2点を挙げる。

1点目は、研究推進校の先生方の振り返りに、「時間にゆとりがないと教師主導型になってしまうことがある」、「学習感想を充実させられなかった」等が見られたことである。今後も、研究推進校の課題を的確に把握し、きめ細かい伴走支援の在り方を探る必要がある。

2点目は、「学びの充実シート」の改善である。**V3アンケートの実施**の項の**③シートの活用**では、他の項と比較するとアンケート結果の満足度が低くなった。今後は、教員の自律的な学びを促進するシートの改善及び負担感を軽減するための効果的な活用方法の開発とともに、教員自身が振り返

りの価値を問い直し、学びを続けることの重要性を促していけるよう、本センターから発信していく必要がある。

課題の改善に向けては、研究推進校の管理職や研究主任とさらに綿密な連携を図り、研究推進校のニーズや課題を的確に把握し、より有効な研究支援の在り方を探っていく。

【研究推進校】

大月市立鳥沢小学校 校長 土屋 義寛

【山梨大学連携・教育研究会アドバイザー】

山梨大学 客員教授 河野 瑞穂

山梨大学 准教授 角田 大輔

山梨大学 准教授 樋川 裕幸

【総合教育センター研究アドバイザー】

教育研究推進幹 平沼 公香

主幹・指導主事 外川 陽清